

# 令和2年度の学力調査について

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策で、全国学力・学習状況調査実施日(4月16日)は臨時休校中でした。よって全国一斉の調査は行われておらず、奈良県や全国の平均値と比較できないことをご了承いただきたいと思えます。なお、問題は各校に配布されましたので、本校は7月30日に実施しています。



## <国語>

本校の平均正答率は73.4%でした。ちなみに、昨年や一昨年の奈良県や全国の平均正答率は、60%台前半でした。

「漢字を文の中で正しく使う」ことを問う設問では、正答率が75.8%と低くなっています。「ひじょうに驚く」の「ひじょう」を正しく漢字で書けたのは、60.0%でした。しかし、「考えをあらため、」の送り仮名表記の正答率は、83.2%、「たしかめる」の送り仮名表記の正答率は84.2%で、高い正答率です。この結果を受け、日記や作文等の「書く」活動において、児童にもっと意識して漢字を使わせるよう指導すること、それから、新出漢字を学習する時は、使用例とともに、その漢字の持つ意味をしっかりと覚えて指導することが大切だと考えています。

「修飾・被修飾の関係」を問う設問も、誤答が多かった設問です。「ずいぶん長い時間がすぎました。」の、「長い」は、どの言葉を詳しくしているのかという質問に対し、正解の「時間」だと解答した児童は、66.3%、「一ぴきの大ギツネが、しきりに正太郎のほおやくちびるをなめまわし、」の「しきりに」が詳しくしているのは、「なめまわし」だと正しく解答したのは66.3%でした。この結果から、子どもたちが普段から文章を読む時、または作文を書く時に、言葉同士の関係を意識しながら文意を捉える指導が必要だと考えます。

また、ほかに正答率が低かったのが「事実と意見とを区別して文章を書く」問題です。正答率は31.6%で、とても低い値になっています。意見を述べるには、その根拠となるいくつかの事実が必要です。その事実が書籍から

得たものであるならば、出典した本とその内容を記載しなければなりません。これは国語科だけではなく、他の教科でも必要な基本的な技能です。国語科の学習内容は、すべての教科学習に通じるものがありますので、このような基礎基本を繰り返して指導することで、定着を図らなければならないと思いました。



## <算数>

本校の平均正答率は76.5%でした。ちなみに、昨年や一昨年の奈良県や全国の平均正答率は、60%半ばでした。本校児童の課題については、数年前から同様の傾向が続いています。それは、記述式の解答を求める問題に弱いということです。本年度の設問では、次のようになっています。

設 問	正答率
二つの長方形の辺の長さを比較し、長方形を縦に並べる個数と、横に並べる個数の求め方と答えを、言葉や数を用いて記述する。	53.7%
四角柱の底面の大きさを求めるために示された $5 \times 4$ の式の意味を、言葉や数を用いて記述する。	36.8%
示された例をもとに、別の式の求め方を言葉と式を用いて記述する。	43.2%
説明するにはどの棒グラフが適切なのかを判断し、選択した理由を記述する。	60.0%



子どもたちの解答を見ていると、自分の考えを表現するための言葉選び方や使い方、つまり表現の仕方に課題があるように思われました。計算の仕方や求め方は理解しているのですが、記述する時に言葉が足りず、説明不足になっている児童が多く見られます。授業の中で自分の考えを表す活動を積極的に取り入れ、何をどの順番で説明するのがい

いのか意識しながら、子ども同士で意見を交流させる指導が大切だと思います。

また、 $1/3 + 2/5$ のように、分母の違う分数の計算を、図を用いて説明されたとき、その考え方が理解できない児童が多く、正答率は54.7%でした。なぜそのように考えるのかを理解しないまま、計算の仕方だけを知っている児童が多いことがわかり、普段の授業の中で、図や表を書く活動を行うこと、図や表をICTを活用して提示することが必要だと考えます。

「展開図から円周の長さと同じ側面の長さを選択する」問題の正答率も低く、52.6%でした。問題文が長くて、何を問われているのか理解できなかった児童、円周と円の面積の求め方を混同している児童が多くいたことが原因です。調査結果から見られる本校の児童の課題を教職員で確認、共有し、各学年の発達段階に合わせた指導を進めていかなければならないと思いました。